

西伊豆健育会病院

症 例 概 要 患 者 : 70歳代 女性

病 名 : ラクナ梗塞

入院期間: 令和4年6月~令和4年8月

経過:

本症例は当院看護師の御母堂で、令和3年8月にラクナ梗塞を発症し当院リハビリにて軽介助歩行獲得し、さらなるADL改善の為に、令和3年9月に回復期病院へ転院。しかし誤嚥性肺炎を繰り返しADL全介助、経口摂取困難にて経鼻栄養となり、当院へ戻られた。当院にてPT、OT、STの積極的なリハビリ介入にて短期間で再度歩行能力の獲得が得られ、また経口摂取が行えるようになった。それに伴い、ご本人と娘が望んでいた自宅退院が可能となった。

内 容

当院看護師の御母堂で、昨年8月にラクナ梗塞を発症し、当院にて積極的にリハビリを行った結果、上下肢BRS stageIからBRS stageVIへと改善が認められ、軽介助歩行まで獲得できた。さらなるADL改善の為に回復期病院に転院したが、ADLの改善は得られず、ADL全介助、経管栄養状態で当院に戻られた。

ご本人と娘である当院看護師のご希望は自宅退院であったが、全介助状態では施設入所か、もしくは退職し介護に専念せざるを得ない状態であった。

約2ヶ月という短期間でADL全介助状態から積極的にリハビリを行った結果、再度軽介助歩行の獲得が得られ、ST介入により経鼻栄養を脱し経口摂取が可能となった。

今現在もADLは改善しつつあり、8月中旬ごろに自宅退院となっている。ADLの改善が得られたため、介護負担も減り娘である看護師も退職することなく当院で勤務を継続することになった。

回復期を経たがADL全介助状態になるも、当院で再びリハビリを行い、短期間でADLの改善と本症例のご希望の自宅退院を達成することができ、また、娘である当院看護師の勤務を今後も継続することができた。

当院スタッフ一丸となって看護、リハビリ、ケアをした結果、当院転院時は自宅退院やADLの改善は困難と思われたが、ADLの改善や本症例のご希望の達成、看護師の離職を防いだ稀な一例です。

介入時B.I 0点 HDS-R12点

入院2ヶ月後B.I 75点